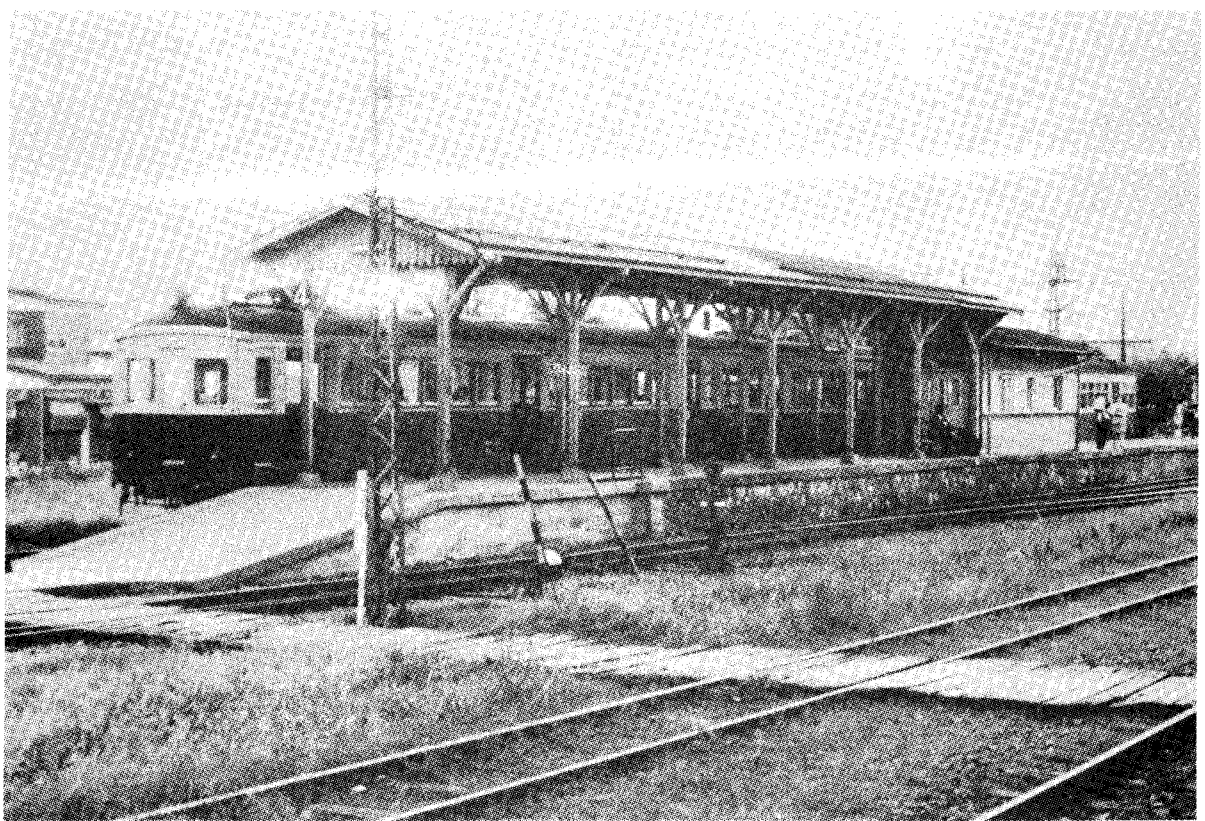


臥龍が丘は緑なり

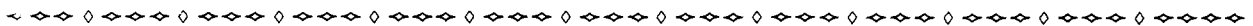
松高同窓会東京支部会報

昭和63年秋季号



昭和63年秋季号目次

会報第5号をお送りします	東京支部長 佐伯 益 一	1
63年度東京支部大会		1
同窓会の繁栄は同級会の成果による	佐伯 益 一	4
お便りの中から		5
同窓会本部総会		6
思い出の秘蔵写真		7
クラス会便り	旧中28, 高6, 高10	8
蒲原鉄道物語り	高地 寛	9
寄稿 小泉先生と浮田先生	長野 武夫	12
〃 木俣牧師の思い出	水尾 広吉	14
〃 日本の甲冑	亀嶋 謙	15



(表 紙 写 真)

蒲原鉄道五泉駅ホーム (大正12年建築)

現在も昔のまゝの姿 今さら説明の要もないだろう。

会報、第5号を お送りします。



東京支部長 佐 伯 益 一

秋も深まって参りましたが同窓の各位にはお褒りなくお過しの事と存じます。

ようやく『臥龍が丘は緑なり』第5号を、お届けすることが出来ました。母校本部でも『松城』第2号の発行を急いでおりますので恐らく一緒にお送りすることになると思います。ゆっくりと時間をかけて読んで頂き、過ぎた昔をひと時の間でも思い起こしてみして下さい。

そしてお互い電話をかけ、便りを書き、旧交を暖めて

頂きたいと思います。本年6月11日の支部大会に初めて参加された方が1時間後には、もうすっかり打ちつけて『こんなすばらしい会は始めてだ。この次も必ず連絡して、』と語っておられたのが印象的でした。

会報編集委員会も設置されました。次号からは皆様の御期待に添えるような立派な会報に生れかわると思います。どうぞ会報を何時までも守り育て下さい。簡単ですが第5号発行に当り御あいさつ申し上げます。

63年度東京支部大会 6月11日 出席者113名で盛大に開催

本年度の同窓会東京支部大会は6月11日、午後3時半より『ホテル高輪』トロピカルルームに於て開催された。出席者は同窓生109名、本部より、茂野会長、法性学校長、板垣(高1)関谷(高5)両先生の4名、計113名で昨年の大会も盛大であったが(出席98名)本年は、それを上廻る盛況であった。

定刻、大会は総合司会、伊藤幹事、司会、八木、深見、大橋三幹事によって進められ、先ず、中村事務局長の経過報告、会計報告があり、芳賀幹事の会計監査報告で万場一致承認された。(会報第4号に掲載済)

次いで佐伯支部長の力強い大会あいさつ(別掲)茂野同窓会長、法性学校長のあいさつと続き母校同窓で学校職員でもある板垣、関谷両先生の自己紹介を兼ねたあいさつのあと、赤山会々長亀嶋謙氏の開宴あいさつ、最長老、長野武夫氏(旧中3回、大正7年卒)の乾杯音頭によって懇親会は始まった。

会場を埋めた同窓生があちこちで輪になり久しぶりの再会を喜び、談笑する中を、本年、特に依頼したコンパニオン2名が会場内を忙しく料理飲物等を持ち運んで居たが、これは高齢者から大いに喜ばれた。このわけではなからうが山盛りの料理が全部、キレイに売りきれてしまった程である。

同窓のビクターレコード専属歌手、西田みどりさん、(小沢幸子、高²⁰22回卒、村松町)のアトラクション頃から会場は大いに盛り上がり、カラオケが始まり、鶴巻、堀、両幹事のカメラマンの活躍が目立ち、ポラロイドカメラによる即売も好評であった。抽選会では出席者各自が持ち寄った景品が山程並び、『越の寒梅』から高級ウイスキー、折たたみ洋傘、石鹸、焼酎に至るまで続々と当選者に贈られ、ほぼ全員に行き渡り出席者を喜ばせたが、本年は特に景品の寄付が多かった事は同窓会に寄せる関心の深さを示すものであり、感謝の他はない。

特に本年は今までの大会への未回答者等を整理して案内状を約半分にしぼったのであるが、出席者は逆に増加し、噂には聞いていたが東京の同窓会がこんなに盛大であるとは知らなかったと本年初出席者の言もあり、次回も又是非出席すると会員名簿に登録を依頼してゆく人が多かったのが今回の顕著な特色であろう。

興ずる事約3時間、恒例の校歌、応援歌の大合唱のあと佐伯支部長の音頭で全員の手締め、法性校長の発声による、同窓会東京支部万才三唱で、本年度大会の幕を閉じたが最後は役員全員、会場出口でお互い固い握手を交わし乍ら出席者を見送った。

大会終了後、2次会に赴く者、引き続きクラス会を開く学年等あり、誠に意義深い一日であった。

尚当日の出席者状況は次の通りである。

案内状発送数	455 名（招待者を除く）
出席者数	109 名（〃）出席回答は 120 名
欠席者数	170 名
返事無し	176 名

本年度大会記念品は、健康医療品、セラピーバンで中村幹事の寄贈によるものである。

支部大会出席者氏名（順不同）

〔旧中〕 34 名

長野武夫、川瀬五郎、渡辺文男、水尾広吉、横山信夫、小田恕哉、山口甚三郎、千代国一、見方謙策、大橋文夫、佐久間精一、中村倉吉、田代正夫、亀嶋謙、渡辺方夫、茂野宏一、堀哲二、芳原英男、小浜毅郎、武藤三郎、佐伯益一、中野博、西山莊平、波田野義孝、田中正紹、奈良泰夫、松尾昭夫、松尾貢、岩見益教、伊藤勇五、芳賀健一、中村雅明、加藤三代太、斉藤和男

〔旧高女〕 7 名

大橋也子、田村ミツエ、岡本和子、一氏アイ子、鈴木節子、小林早月、佐藤玲子、

〔高校男子〕 40 名

篠川恒夫、青木猛、今井正、関孝世、渡辺八郎、土田猛、瀬倉武志、伊藤勤吾、鈴木多喜男、大江佳一、新井康夫、熊倉芳夫、沢出越充、佐久間英輔、浅井昭男、小野里康興、八木又一郎、山崎輝雄、岸谷猛、塚田勝、松尾正春、堀直昭、関塚豪、鈴木輝雄、吉井清、関和世、石黒四郎、大橋貞夫、今井孝宏、鶴巻浩、米山正、小日

山芳栄、高岡雄三、北沢省三、田代信雄、中村雅臣、青木微和、三室茂和、山崎信次、武藤則昭。

〔高校女子〕 28 名

大島エミ、佐藤八重、杉山和子、高橋睦子、松本豊子、水野睦子、深見洋子、稲垣美知枝、佐藤句子、治田レイ子、片柳ムツ、木村孝子、緒方美恵子、浜田朝、寺山征子、真水道子、田中富子、小島典子、荒瀬喜美子、中川米子、山下由紀子、飯利幸、斉木明子、飯島玲子、中山斉子、由良美智子、山田孝美、小沢幸子。

以上

当日会場受付にて次の方々から御寄贈を頂きました。
有難く御礼申しあげます。

①寄付金（単位千円）敬称略

見方謙策10、岡本和子3、小田恕哉2、佐伯益一2、伊藤勇五2、沢出越充2、

②祝儀 村松高校同窓会40、茂野敏郎10、

③抽選会景品（品名、敬称略）

渡辺文男、中村倉吉、茂野宏一、武藤三郎、佐伯益一、西山莊平、松尾貢、伊藤勇五、芳賀健一、斉藤和男、鶴巻浩、佐久間英輔、堀直昭、沢出越充、塚田勝、大橋貞夫、青木敏和、大橋也子、岡本和子、小林早月、鈴木節子、

以上

当日は受付が大変混んでおりましたので洩れがあるかも知れません、あしからず御諒下さい。





経過報告する中村事務局長



支部長寄贈の「越の寒梅」の抽せんは茂野会長の手で



司会席での健斗



校歌の大合唱の音頭をとる



小沢幸子さんの熱演!!



受付は大多忙
(出席者の名札も用意)

同窓会の繁栄は同級会の

成果によって!!



東京支部長 佐伯 益一

63年度支部大会開会挨拶の中から

本日は大変御苦労さまでございます。

同窓会について私の常に考えております事を述べさせて頂いてご挨拶に代えたいと存じます。

同窓会とは何であろうか。又同窓会に求められるものは一体、何であろうかと、この事につきまして私の長年の持論であるのでありますが同窓会は、同じ学校で同じ年代を過し同じ体験をした人達が、時には一堂に会し昔を懐かしみ、思い出を語り、酒をくみかわし、又歌をうたうという親睦の場であり、同時に心の安らぎを求める場でもあると思います。

又、現今の情報化社会の中に於て、私達の人生にとって、又自分の商売、職業にとって何か意義のあるものをつかみとろうという意欲を持った人達の集団でもなければならぬと考えております。

この意味に於て私共役員一同は、こゝ数年間、同窓会発展のために、又この目的達成のために一生懸命努力を重ねて参りました。会報の発行然り、名簿の発行又同じ、テレホンカード或いは手帳等の発行も、この目的達成のための一つの現れであるのであります。そしてその最たるものが本日こゝに開催いたしております同窓会東京支部の大会であります。

先般来、同窓各位に本日の御案内状を差上げました処、この様に多数の方々においで頂き盛大な大会となりました事を厚く御礼申上げる処であります。東京は申すに及ばず、はるか静岡、神奈川、千葉、埼玉の各県からも御出席を頂き、母校村松からは、茂野同窓会長、法性学校長

を始め、板垣、関谷両先生を遠路はるばるお迎えし本大会に花を添えて頂いております。私の持論のもう一つですが、同窓会は同級会の積み重ねによって成り立つという観点を、学年幹事の方々がよく理解されてクラスの人達に声をかけて下さいました。おかげを以って、このように近來まれに見る立派な大会となりました事を心から厚く御礼申しあげる次第です。私共の考え方、行動等につきましては会報等に述べてありますのでよく御理解願いたいと存じます。

本日の大会開催に当り、中村事務局長始め役員幹事の方々に多大な御協力、御苦労をお願い致しました。又尚ホテルからも色々御協力を頂いております。皆様方に厚く御礼申し上げます。最後になりましたが皆様から安からぬ会費を頂いておりますが、飲物も料理も充分用意したつもりでございます。どうぞ時間の許す限りゆっくり召し上って頂き、御歓談下さるようお願いいたします。そして会費以上のその何倍もの何かしら大切なものを持って帰って頂きたいのであります。

長口上は皆様の歓談の邪魔になります。所信の一端を述べさせて頂き、御あいさついたします。



お便りの中から

前略、先日は同窓会東京支部の集いに参加させて頂き、先輩とか後輩という、かたぐるしい枠から外れて、なつかしく楽しいひとときをすごさせて頂きまして誠にありがとうございました。当日撮らせて頂いたスナップ写真、大変に出来ないものではありますが思い出の一つにでも加えて頂ければ幸いと存じ、同封申し上げます。(後略)

二信

前略、過日の同窓会での写真を沢山にご恵送下され、誠にありがとうございました。実物よりも遥かに良く撮れていたのが何よりも感激致しましたが、技術と高級カメラでアングル良く撮って頂いたことへの感謝を肝に銘じております。(注.撮影堀直昭幹事)

それにしても、恥をかきすて、盛大な集いに我を忘れて音痴をご披露してしまったことは聊かの後悔がございます。然しこれも支部長さんのご配慮によって盛り上げて頂いた雰囲気から酔った証拠だと思ひます。来年の再会には同級生が一人でも多く集えるよう心がけたいと思ひております。何かとご多忙のなかをいろいろとご心労を忝けなくし衷心より厚く御礼を申しあげせす。末筆乍ら

益々のご活躍とご健勝をお祈り致します。草々

(旧中26回卒，武藤三郎 8. 16)

前略、先日はいろいろとお世話におずかりありがとうございました。最後は時間の都合で尻切れに失礼して申し訳ありませんでした。

お招きに甘えて久しぶりに東京の会合に出させて頂きましたが、なつかしい顔、顔、顔を拝見、皆様それぞれに郷里を離れて人生の年輪を重ねながら健斗なさっておられる姿に接しまことに幸せでございました。会合設営には支部長様はじめ有志幹事の方々の並々ならぬご配慮とご奉仕、大変でございましたでしょう。深甚の謝意と敬服の念を表したいと存じます。帰りましてから在郷の同窓職員等に状況報告致しました。右取急ぎ、御礼までに一筆申し上げます。

(高 6 回卒、関谷正中、母校職員 6.16)

他にも同様趣旨のお礼がたくさん来ております

(係より)



熱唱中の武藤三郎さん



あいさつする関谷先生

同窓会本部総会 8月17日

昭和63年度の母校同窓会理事会及び総会は8月17日午後4時より村松町「新滝」にて開催された。出席者は会長、学校長他約60名で、東京支部からは佐伯、中村、伊藤、川瀬の4名が出席した。理事会における議事内容は次の通りである。

1. 昭和62年度決算報告（承認）

収入決算額	1,049,206 円
支出決算額	409,540 円
差引残額	639,666 円（次年度へ）

2. 昭和63年度予算案（承認）

収入支出予算額 1,453,666 円

収入については繰越金及び来春卒業生（271人）の入会金3,000円も見込んでおり、従来の2,000円より1,000円増額となるが未決定である。

支出については会議費、活動補助費、会員連絡費、旅費、雑費等で計50万円余、予備費を94万円余を見込む。

3. 役員改選について

議題は役員改選となっているが、各地に支部も出来た事であり、又80周年記念対応のため役員を増員したことである。

従って構成員は、会長1、副会長2、顧問6、理事55、監事3、となったが、理事会への出席は会長以下25名位であった。東京支部からは顧問に水尾正二（11回）見方謙策（18回）、理事に佐伯支部長の

名が挙げている。

4. 80周年にむけて

記念事業として同窓会館（仮称）建設の話が起きているが、図面は出来ているらしいが資金、運営の面で、未だ成案を見ていない。企画委員会で煮詰めているのであろう。（5K×10Kの2階建）

5. 名簿発行について

名簿発行の作業は来年3月出版を目ざして着々と進んでいる。コンピューターで処理しているので各支部毎の名簿も出来るという。

6. その他「松城」2号の発行など

本部会報「松城」第2号は9月末発行を目ざして編集を急いでいる。創刊号は約7,000部印刷し経費は約40万円かゝったとの事で、これは特別会計からの支出である。

特に問題なのは配布の点であり、色々と意見が出たが結論は出なかった。

東京支部では配布の問題について意見を述べた。編集委員の伊藤淳一氏（旧中33回）が広告の募集について精力的に働いておられる。

現在、東京の外に支部のあるのは次の通りである。

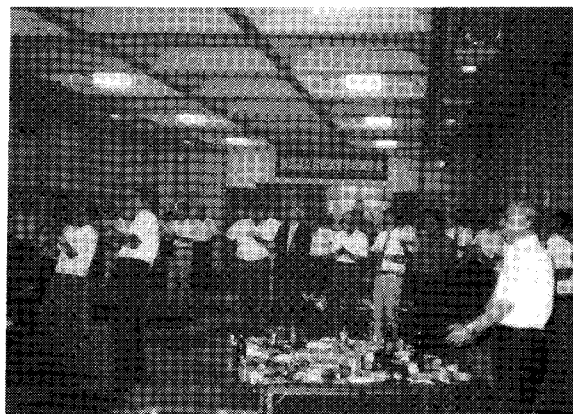
（ ）内は支部長名

- 五泉（樋口政文、旧中28）
- 新津（結城守、旧中16）
- 新潟（佐野宏、旧中20）
- 津川（石川巖、旧中33）

佐伯東京支部長より、村松に支部が無いが、どの



生徒のブラスバンド演奏



応援歌の大合唱

様に考えているのかとの発言があり、近く結成を考へているとの応答があった。

理事会終了後、総会に入ったが質疑なく終了、懇親会に入ったが、開宴に先だち、生徒の部活の一部である吹奏楽団の演奏があり、仲々見事であった。始めに担当の関谷先生から縷々、苦勞話生徒が真面目に活躍している話等、説明があり、出席者一同を感銘させた。同窓会から金一封が贈られたが、東京支部からも持参の支部テレ

ホンカードを全員に贈った。

会長、学校長のあいさつに続き、東京、新津両支部長のあいさつ後、懇親会は始まったが旧友夫々が輪になり和気あいあいの内に楽しい一時を過し、最後は恒例の旧校歌、応援歌の大合唱で幕を閉じた。続いて有志による二次会が“木村”で開かれ、支部から3名が出席した。

思い出の写真集

秘蔵写真をお貸し下さい



前列左端は佐藤至広氏（旧制新潟高校，東大法学部），一人おいて右へ斎藤教諭，石田教諭，里見教諭，後列右端は田所喜一氏，一人おいてその左大橋文夫氏（旧制新潟高校，東大法学部），後列左から2番目は陸軍士官学校卒業の少尉，3番目の陸軍曹長は陸士在学中の少尉候補生か？

（昭和13～14年ごろの撮影と思われる。場所は，村松町の料亭でえびやか，きむらである。）

（斎藤朝之氏蔵）



クラス会だより

旧中第28回生クラス会

旧中学校の第28回生（昭和18年卒）の昭和63年度クラス会は、6月13日（月）新潟県、湯田上温泉ホテル小柳で開催された。（村松地区幹事宮嶋、石黒、藤田）出席者は30名、このうち県外からの参加者は、3名（仙台、東京、群馬）であった。

当日は、まず午後2時に母校（3階会議室）に集合し、学校長法性先生から現高校の概況、教育計画、生徒の進学状況などについて、いろいろとお話をうけたまわり、次いで教頭広田先生の先導で新校舎内、校庭グラウンド、同窓会館建設用地などを見学した。

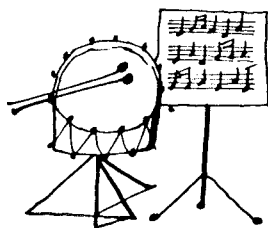
校門前で記念撮影をした後、マイクロバスで村松記念今園に寄り、しばらく園内を散策して、老松や桜の大木、忠魂碑、グラウンド、練兵場などをながめながら、お互いに懐旧談ひとしきりという雰囲気（^{ふん}）にひたった。

ホテルの会議室で、各自の自己紹介と近況報告を行った後、午後6時半から大広間で懇親会に入った。やがて宴たけなわとなり懐古、追想、論ずること2時間半、最後に応援歌と万歳三唱で締めくくった。

翌14日は、朝食後に一同解散したが、一部有志の者たちは、当日行われる松高体育祭に飛び入りで出場し、昔の応援歌を演じてみせてやろう、といって再び村松高校へ出向いていった。

なお、来年度のクラス会は、新潟地区担当で実施することに決定した。

（群馬県藤岡市 斎藤朝之記）



高校6回卒業 3年1組クラス会

昭和29年3月卒業3年1組のクラス会が、8月17日午後5時から、新発田市郊外、月岡温泉「ホテル摩周」において、出席者19名のもとで開催された。

東京支部からも山崎亨、佐久間英輔、沢出赳允の3名が出席した。

幹事の挨拶につづき次回幹事の選出を行ったあと、東京支部幹事、佐久間英輔氏の乾杯発声で懇親会に入り二次会、三次会と深夜まで楽しい時を過ごした。

18日朝食後、次回1990年の開催を満場一致で承認後解散した。

尚、同クラス会あてに佐伯東京支部長より心暖まる祝電をいただきまして、ありがとうございました。紙面をお借りして、厚く御礼申し上げます。（沢出赳允）

高校10回生 同期会

昭和63年6月11日、東京支部大会終了後、午後6時半より、「ホテル高輪」ローズルームに於て高校10回卒の同期会が開催された。

開宴にさきだち、佐伯支部長より「同期会が同窓会東京支部の基礎であり、本大会出席者100余名の内、高校10回生の皆さんがこのように沢山、出席された事は支部としても大変喜ばしい事であり、同期会をどうぞ大切に育てて頂きたい。皆さんの御健勝を祈る……今後とも宜しく……」との祝辞があり、乾杯の後懇親会に入り午後8時盛況裡に散会した。

出席者は次の18名であった。（順不同）

大橋貞夫、今井孝宏、新保優、鶴巻浩、米山正、小日山芳栄、高岡雄三、広田道衛、真水（安中）道子、田中（今井）富子、小島（藤井）典子、寺山（鈴木）征子、荒瀬（相田）喜美子、山下（野沢）由紀子、市川（赤沢）俊、許斐（林）紀子、中川（佐藤）米子、飯利（佐藤）幸。
（鶴巻 浩）

蒲原鉄道の軌道（二）

高地 寛

時代の背景 信越線は明治32年に開通し、村松町からは西山越えの連絡で難儀なものであったが、岩越線（今の磐越西線）が大正3年に新津―五泉―馬下と通り、村松町を置き去りにして敷設されてしまった事は、地方民の猛反対があったと聞かすが、城下町として栄え、軍都として誇りを持つ村松町にとって大変な打撃であったであらう。

大正3年の第1次世界大戦の勃発は明治期に蓄積された日本の経済力、工業力を一挙に開花させる千載一遇のチャンスであった。

先行き不安などから、やゝ混乱を呈した経済界も其の後、俄かに戦争景気の状態を現出して来た。

軍需品及び軍需関連品のみならず一般物資に至る迄輸出が増大し、又海運界が活況を呈した事から輸出産業や造船業が急膨張し挙げて前代未聞のブームに湧いた。こうしたブームは明治末年の気違い景気と同じく“成金”の温床となり、闇雲に掴んだ富を愚かなやり方で消費して見せ、心ある庶民のひんしゅくと敵意を買うケースも多数現われたものであった。

村松郷の商工業の中心地である村松町は、殆んどが商業、工業その他雑業に従事する町であり、勤労者戸数は全体の64%に達しており、町の生産額の88%迄が工産物で占められており、文字通り中蒲原郡内有数の工業町としての性格を備えていた。

土産物は織物、生糸、清酒、製茶、筆に代表され、重要な輸移出品であった。

村松にも農家の生繭、茶葉の出荷も再び活気を取り戻し、製茶、製糸業も生産回復が伝えられるようになる。

村も町も活気を取り戻し、日雇労働は仕事量も増えて、景気の回復と共に米穀商が盛んに村松の古米も買い占めて移出して品不足が現われ米価格も急激に上り始め、白米の小売価格が五泉より割り高となり、燃料の柴、薪、木炭類から鶏卵、野菜迄値上りし零細勤労者を圧迫し始めた。勤労者の賃金も後追いの形で上昇したが諸物価の

騰貴と勘案すれば決して暮しが楽になったのではなかったようだ。一方、日雇、諸職の賃金の枠に適宜改訂される職種と違い官吏、職員等の俸給生活者は極めて深刻で、質屋通いをする家が俄かに増えたと言う。

大戦景気で俄かに盛況となるのが、川内村の鉱山業であり、銅を始め金属製品の騰貴が再び川内の谷筋に鉱山開発の槌音を響かせる事になった。

新しい坑道を掘鑿し鉱石を山麓迄運ぶ運搬夫の不足を来たし、引き抜き迄行われたと言う。

仙見川溪谷の奥から村松附近迄の鉱石の搬出は、どの鉱山家にも頭の痛い問題であり、冬期の積雪と割り高の人夫賃の問題を抱え採掘事業の見通しの立たない鉱山は休・廃業の道を辿ったが、中には大掛りな鉱石運搬施設を建設して採掘事業に取り組んだ白滝鉱山がある。

白滝鉱山は毛石山の東側山腹にある50万坪の鉱区で、鉱石搬出は架空索道を利用し、門原を経て、上阿弥陀瀬地内の仙見谷停車場迄を電気動力で搬送するもので、索道の送量を1日60噸以上を見込み、大正7年暮れには架空索道は完成し、日に40噸の鉄鉱、銅鉱が索道によって搬送されるようになった。

所有者は、元鉄道院運輸局長を勤めた朝比奈林之助であった。

村松・五泉間の交通 明治の終り頃、五泉・村松間に6人乗りの乗合馬車が往復しており、チャラメルラッパを吹いて長閑に走る牧歌的な趣のあるもので6台が互いに競って客を乗せていたと言う。

大正7年頃になると乗客が少なく、収支償わない状態に落ち入って来たが村松・五泉間の馬車賃は1人片道15銭であった。此に対し人力車の方は盛況で60両にも上り、2人引の人力車が55銭、風雪の舞う日には70銭であったと言うが、利用客は軍隊関係が多かったと言われている。自転車の所有台数は僅かに110両位であったらしい。

好景気で物資や人の往来も激しくなったが、人力車は目的地や訪問先迄直接乗りつけられる便利さが買われた

もので、「戸口から戸口」へ自家用車が急激に伸長し、鉄道、バスの公共輸送が斜陽化して来た近年と同様な現象であった。

大正8年12月1日に村松・五泉間を乗合自動車が初めて走ったが、新潟自動車商会の経営する村松自動車商会在がフォード車16人乗りで、村松上町より五泉駅角屋前迄の1日7往復した。

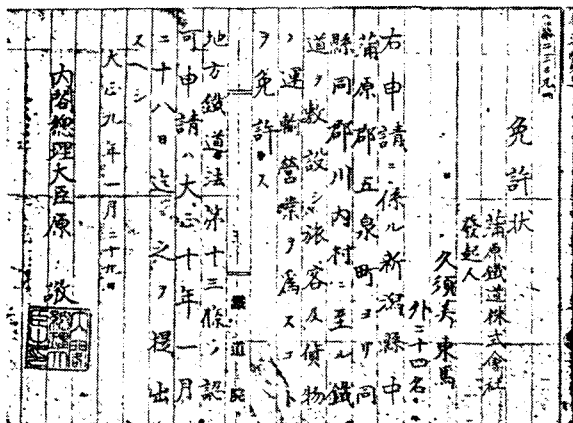
所要時間は18分で運賃は片道45銭となり、人力車より割安で非常に嬉ばれ、開業の12月の乗合は2,058人と予想以上の業績であったが大正12年10月蒲原鉄道の開通と共に廃止した。

蒲原鉄道建設への途 大戦好況期に入り村松と五泉の間の人の往来は著しく増加し、之に加えて白滝鉱山の鉱石運搬の必要も加わって私立鉄道開設の気運が次第に盛り上がる事になった。

大正8年5月24日に鉄道協議会が持たれ、日本電気製鉄(株)の朝比奈林之助と村松町の有力者との間で持たれたもので、村松側からの出席は、町長の鈴木礼四郎、服部幾太郎、笠原藤七、茂野誠衛と十全村から高岡忠郷であり、設計その他一切の手続きは、朝比奈林之助が担当する事に定められた。

同月26日には村松町役場に於いて、鉄道期成同盟会創立総会が開催され、鉄道創立委員には、服部幾太郎、笠原藤七、茂野誠衛、茂野弘作、高岡忠郷、町長鈴木礼四郎と朝比奈林之助が就任した。

次いで発起人に谷武三郎も加わり、鈴木町長を除く7人は積極的に近郷町村の有力者に発起人参加を呼びかけた。6月14日には、村松町の商工業代表者に対し、16日には五泉町の重立ちに対し、電気鉄道開設の目論見書、



収支概算等について説明会が開かれた。

此の時には、会社の名称が蒲原鉄道株式会社となり、広く県下に賛同を募るべく力が注がれた。

設立請願の準備は順調に進み、蒲原鉄道創立事務所を村松銀行社屋内に設け、発起人として久須美東馬(越後鉄道)、白勢春三(第四銀行)、中野信吾(中野興業沼垂銀行)等も名を連ね、7月14日には県庁へ鉄道敷設申請書を提出し終えた。

其の後、県の認可を経て、鉄道局へ提出され、大正9年1月29日附監第2339号を以て免許状が下附された。

大正7年11月11日に第一次大戦は休戦条約締結となったが、戦争景気の反動は1年を経た大正9年春に突然やって来た。東京・大阪株式取引所上場の一流銘柄が軒並み暴落し、不況は深刻を極め、引いては社会の世相を暗いものにして行った。

大正9年3月から株式の募集に着手したが、此の計画は当初の期待通りには進まず、白滝鉱山が折からの経済恐慌で営業不振に陥ってしまい又五泉、村松と其の近郷の資産家から株式の応募が遅々として進まなくなった。

翌大正10年迄の開業の目途も立てる事が出来なくなり、鉄道敷設計画は頓挫しそうになってしまった。

鉄道建設目論見の縮少 苦悩の2年間を経て、鉄道施設が愈々実現する事になったのは大正11年である。

大正11年6月22日に改めて定款を作成し直し、資本金を28万円に縮少し、鉄道施設区間を五泉町から菅名村を通して村松町に至る4.2kmを第1期工事とし、川内村への延長は見合わせられて橋梁費が不要となり設立に向けて準備に入った。

此の時には、株式の3分の1を出資する予定であった日本電気製鉄の朝比奈林之助は創立委員から抜け、五泉町の有力者も一切顔を出していない。

会社設立に対して積極的な役割を果たしたのは、村松町、菅名村、川内村、十全村の有力者達で、村松町の茂野誠衛が其の中心になった。

株式は1株額面50円で、株式5,600株を発行し大正11年7月15日より同年8月10日迄の期間に株式申込を公募する事とした。

申込証拠金は1株5円としたから広く地域民が申し込む機会を得、40人で引き受ける予定の株式は3,590株で一般公募は2,010株であった。

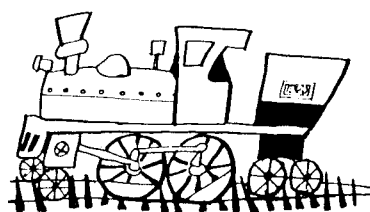
株式払込金に対しては、開業迄年5%の利息も保証されたから公募も順調に進み、開業への見通しは明るいものとなった。
(以下次号)

〔 筆 者 紹 介 〕

昭和12年、旧中第22回卒

昭和22年12月復員後、同12月12日蒲原鉄道入社

総務部長企画室長、取締役を経て49年2月常務取締役、61年非常勤取締役。



株式会社 多 摩 電 子

代表取締役 大 橋 貞 夫
(高校10回卒十全出身)

本社 〒158 東京都世田谷区等々力3-18-8
電 話 03-701-1147
自宅 〒158 東京都世田谷区玉川4-20-8
電 話 03-709-1570

医療機器・健康機器販売

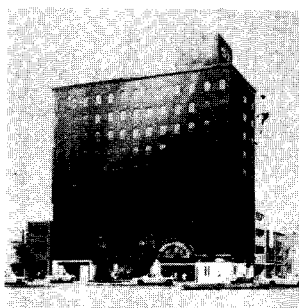
株式会社 ツ ル マ キ
M R C 事業部

〒113 東京都文京区本郷3-41-10
TEL 03(818)6448

代表取締役 鶴 卷 浩
(高校10回卒村松町馬場丁)

自 宅 東京都北区豊島5-5-5-306
TEL 03-912-6470

ビジネスに
2つのヴィラ

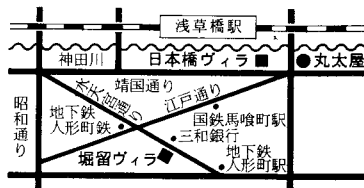


● 電話 (〇三) 六六八〇八四〇
東京都中央区日本橋馬喰町二二一
● 日本橋ヴィラ



● 電話 (〇三) 六六四一〇八四〇
東京都中央区日本橋堀留
一〇一〇一〇
● 堀留ヴィラ

● シングル 6,500 円より (税・サービス料込)



BUSINESS
HOTEL ヴィラ

丸太屋株式会社

代表取締役副社長 塚 田 勝

(高8回卒)

〒103 東京都中央区東日本橋2-26-8
電 話 03-862-0681

自 宅 浦和市原山4-23-12

“ 寄稿 ”

小泉先生と浮田先生

長 野 武 夫



乾杯の音頭をとる筆者

私の郷里新潟県村松町は北越後の山の中の小さな城下町である。もと工業学校のあとを中学校に変えて村松中学が創立された。その創立時の基礎をつくられたのが村松中学校の教頭として赴任された浮田辰平先生でまだ29才の理想に燃えた長身美男の名教師であった。テニスの名手として知られ学生の最大のホープであった。受持は国漢であったが今で言えば社会科にはいるようないろいろなことを教えられた。放課後はテニスの方にも情熱をかけたむけ我々を指導された 私も部員の一人としてめきめき上達し、先生の期待に添えるようになった。この中学時代の先生の崇高な人格と識見、テニスを通じての人間形成にはまことに感謝いっぱいの思いで、卒業し故郷をとり出したが先生もその後外地の学校を転々され、台北第一高女を最後に内地に引きあげてこられ、二度お会いする機会があった。昭和30年の初め頃であったろうか、先生は教育界の一老兵として消え去ろうとする今日でもまだ「少年の夢」を見つづけているという、あきれかえった人間であるとのご趣旨のもとに出版を計画された高師その他の学校の方々や知人門下生などが心よく賛同し発起人となり、目出度く出版するまでに漕ぎつけた。

年の瀬もおし迫った12月に茗溪会館で記念出版の賀会が盛大に開かれ、私も発起人の一人として末席をけがすことになった。

その席に小泉先生もご列席せられ私も慶応出身の一員としてじかじかにご挨拶申し上げる光栄に浴したが小泉先生は浮田先生とはどんな関係でご列席になったか知らなかった。宴酣わとなり小泉先生も祝辞を述べられ、そのあとで浮田先生とテニス談義となりお二人とも50年前のあの大家原頭に於ける庭球生活の内でも最も印象に残る

熱戦を思い浮かべられた。テニスを通じての再会をどんなに悦ばれたか、私達もその友情の麗しさをはげしく羨ましく心から感激して拝聴した。いつまでもその時の情景が睨に浮んでくる。

次に小泉先生が書かれたテニスを通じての浮田観、並びにその仕合の模様を省略して記述する。

『今から数えて丁度50年前の明治38年の秋浮田君は高等師範、私は慶応義塾を代表するテニスの選手で大塚の高師のコートで試合し私が負け、それで慶応も敗れてしまった。それ以前には浮田君と交際はなくそれ以後の50年間にも吾々は会っていない。にも拘らず私には彼とそのパートナーであった飯河君のことを忘れず長い年月の間各地を旅してその土地に在任する高師出身の教育者に会う毎によく飯河君はどうしてですか、浮田君はどうしてですか訊ねたものである。浮田君の方でも私と仕合したことを憶えていたと見え私の噂をしたということの人から——というのは浮田君の後輩で初期のテ杯選手の太田君から——伝へきいた。

浮田君のことを書くとするれば私としては仕合に敗れた時のことを書かなければならぬ。半世紀の昔話であるが久しく日本の庭球界の両雄は高等商業（今の一橋大学）と当時の高等師範であったが、慶応と早稲田とが遅れて擡頭し、一時四校が並立した。慶応の場合は春には飯河、浮田を主力とするチームが三田に来て惨敗させたのである。

秋には吾々が三田から大塚まで出かけ接戦して飯河、浮田と岡、小泉とが当ることになった。細かいスコアは憶えていないが兎角私の方が優勢で今でいうマッチポイントまで追いつめた。次ぎの一点私は浮田の頭上に緩球

その後久しく慶応の者はいかに勝負が最後の瞬間まで判らないものであるかという例にしばしばこの浮田の一打を引いたものである。その時コートで別れたきり吾々は会っていない。始め記したようにそれは丁度50年前の

浮田先生と小泉先生は続いて万人に惜しまれつつ他界された。いま頃は地下でさぞかしテニス談議に花を咲かせておられることであろう。

浮田先生 浮田辰平氏、旧村松中学校歌
 “塵の巷を遠ざけて” の作詞者
 茗溪会館 当時の高等師範学校の会館



ホテル 福 泉

磐越西線・津川駅・鹿瀬駅・下車バス10分
電話 02549-2-3131
(東蒲原郡鹿瀬町鹿瀬)

〒150 東京都渋谷区道玄坂2-16-8
TEL (03) 770-3291

“ 寄稿 ”

木俣牧師の思い出

旧制中十三回生

水 尾 広 吉



私達は七人兄弟で、一番上と下二人が女、中間の四人が男で、私は四男である。私が小学生のとき、木俣哲二という若い牧師が村松町へ赴任してこられ、小学校のすぐ側に教会を開かれた。当時、長姉久は女子美術学校を卒業して、村松小学校の先生をしていたのですぐ信者になり、また次兄茂吉は青山学院の学生の時入信し、夏休みに帰えると、毎晩のように木俣牧師の伝導に同行して提灯を持って歩いた。このような環境下で、兄正二と私はよく日曜学校に通った。父は古風な人だったので、茂吉の行動を大変嫌った。私が小学校五年の頃、父は一杯気嫌で、丁度帰国していた茂吉を大声で怒鳴りちらし、大喧嘩になった。この喧嘩があまり激しかったので、私は決して信者にはなるまいと心に誓った。しかし、木俣牧師の説教に魅せられて、中学校に入ってから日曜学校に通った。一方母は非常に子供の教育に熱心で、親戚をかけ廻って学費を調達し、長兄定太郎は北海道大学の

水産専門部を卒業させた。

ある夏の夕べ、木俣牧師は河内村の早出川の河原にキキャンプを張って伝導された。参加者は20人余りで正二と私も参加した。牧師は河岸に近い数本の松の生えている小高い岩の上に立って、マタイ伝「山上の垂訓」について約一時間熱弁をふるわれた。辺りは夕闇が迫り、早出川のせせらぎの音だけが静寂を破っていた。誰もが心を打たれ、咳一つする人もなく聴き入った。私も深い感銘を受け、この講演が私の一生を方向付ける教訓となった。

その後、正二は満鉄の教育専門学校、私は陸軍士官学校に入学、妹二人もそれぞれ村松高等女学校に入った。田舎で七人の子供全部に中・高等教育を受けさせたので生活は苦しかった。私は近い将来もう一度、早出川のあの河原を訪れたいと思っている。

(昭63・8・15記)

建設機材総合商社

関 東 資 材 株 式 会 社

代表取締役 佐久間 英 輔
(高校第6回卒五泉出身)
小山地区新潟県人会会長

本 社 〒323 栃木県小山市駅南町6-22-3
TEL 0285-27-1931 (代)
宇都宮 宇都宮市江曾島1-9-3
営業所 TEL 0286-58-6181 (代)

各社アイスクリーム
冷凍食品・清涼飲料卸

有限会社 越 後 食 品

代表取締役 石 黒 四 郎
(高9回卒)

会 社 東京都世田谷区岡本1-28-20
TEL 417-5110 (代)
自 宅 東京都柏江市岩戸南2-14-14
TEL 488-2117

「日本の甲冑」

旧中22回卒 赤山会会長

亀 嶋 謙



◎動 機

昨年秋、第二の職場であった早大の常勤を退き長い間の勤めから解放された。定年まで勤めた銀行生活から数えて実に45年に亘るサラリーマン生活であった。終った瞬間、思わず肩の重荷がとれたような感じであった。

これからは全くの自由なんだなと思った。しかし私にはまだ非常勤で且つ無報酬ではあるが、三つ四つの法人の役員職をもっている。

その一つに社団法人、日本甲冑武具研究保存会という会があり、そこの常務理事を務めていて、週一回は出かけている。

人からよく、随分変わったご趣味ですね、どんな動機で関係されたのですかと聞かれる。

なに偶然の動機からであった。新発田の実家の蔵に古い鎧が二領あった。その内の一領はよく保存されていたが、傷んだ方のは子供達のよき遊び道具であった。勝手に持出しては武士の真似事をして遊んだものだ。

そんな事は、もうとっくの間に忘れ去っていたのだが、20年も前、友人と博物館で甲冑の展示会を見に行った。そのとき幼時の記憶が鮮かによみがえってきて、田舎の家の鎧はまだあるだろうか、そして一体どれ程の価値ある物であらうかと懐しく思いだしたのである。早速、田舎から写真を送って貰い、それを持って、予て権威ある会として知られている、日本甲冑武具研究会の本部を尋ね、鑑定を乞うた。その時に言われたことは、こんな小さな写真だけでは判断できないという事と、お家に鎧を持っておられるのなら、私達の会へ入って自分で研究されたらいかがでしようと言われた。その一言が動機となって会員になった。しかしながらすでに、20年にもなるが、一向に分らない。この道は狭いが奥行が深く専門の

知識が多く要求される。専門用語を覚えるだけでも数年もかかる。実に深い。私はもう途中で締めてしまったが興味は津々として尽きない。ずっと続けて研究会だけには出席していたら、数年前、会長の衆院議員赤木宗徳氏から財務担当の常務理事に任命されて引続いて今日に到っている次第である。

◎日本の甲冑

日本の甲冑の歴史は古く凡そ1,500年も前の古墳時代からあったらしく既にその一部が発掘されている。初めは簡明な鉄甲製であったが、武器や、戦闘法の変化に従って推移発展して来た。殊に平安時代以降、武家の擡頭から甲冑は武士の「晴れ着」としての要素を強め、技術的にも高度な発達をとげ美麗なものへと移り変わり、美術工芸品として価値の有り作品が作られていった。その種類も、平安、鎌倉、南北朝、室町、戦国期、江戸と時代によって大きく異なり各々特色を持っている。私が特に好きなものは平安時代の大鎧である。威容備わり、堂々として実に莊重な外観を示しているからである。この時代の鎧は通常「大鎧」とか、あるいは「式正鎧」とも呼ばれる。大鎧とは他のいろいろの甲冑に比べると形が大ぶりであるところからの呼び名であり、また、式正鎧とは武家にとって正式の鎧であるといった意味の呼称である。この大鎧が完成されて最盛期を迎えるようになるのは、保元、平治の乱から治承の乱にかけての時期、つまり平安時代後期から鎌倉時代初期頃と考えられている。この時代の代表的な鎧としては、

- 巖島神社所蔵の「小桜こざくらがね 韋きかえし 黄返おうどし 威よろいの鎧」
- 「紺糸こんいと 威おどし の鎧」
- 武蔵御嶽神社所蔵の「赤糸あかいと 威おどし の鎧」
- 大山祇神社所蔵の「赤糸あかいと 威おどし の鎧」等がある

いずれも胴が裾広がり仕立てられており、小札は幅が広く厚味があり、これらを太い組紐や幅広の革を用いて威してある。大鎧に添う兜も天辺の孔が大きく、鋌頭も大星を並べて打った巖屋兜で両肩から楯の用をも兼ねた大袖をさげている。まことに見るから豪荘な趣きで平家物語などに「大荒目の鎧」と記されているのは、これらの大鎧を指している。この大鎧も実は南北朝に入ると早くも次第に衰退期へと向っていく。戦術の変化から重厚さから脱し軽量さへと向うのである。しかし大鎧こそ最完成した鎧であり騎射戦に適し用と美とを兼備していた。勇壮で、しかも毅然とした威容、周到な素材の取扱いによる構成の見事さは、まさに日本甲冑の最高峰である。

私は、これらの大鎧を何回となく見てきた。殊に武蔵御嶽神社にある「赤糸威の鎧」は東京都青梅市にあり、近いので数回に亘って多くの権威者の方々と参観した。畠山重忠奉納の鎧として夙に名高い名品であり国宝である。

これら大鎧との出会いは私をして、この道に魅入らせ益々甲冑への関心を深めていったのである。

◎先輩の遺訓

入会して楽しみの一つは、大会が順次広く、全国にある支部が主催することが多く、その地方へ行って講演会や甲冑の名品を鑑賞できることであった。支部は全国の大きな城下町にあり、また有名な神社仏閣の所在地にある。名の通った国宝級、重要文化財級の逸品にお目にかかるのも楽しいことだった。

時には、個人の蒐集家のお宅へ伺うこともままあった。印象に残っていることがある。それはもう15年近くも以前のことになるのだが、戦後、財を為したある実業家の別荘へK先生のお供をして伺ったときのことである。拝観した鎧や兜の類は一部修復されている物（これは実は鑑定上には大事な点になるのである）もあったが、概ね、かなりの品であった。それだけで失礼したら、よかったのだったが、ついでにと言われて、この家の主が別室に用意してあった刀剣を十二、三振り持ってこれら見て欲しいと乞われた。内々、その腹づもりだったらしい。K先生は迷惑顔で、私は刀剣の方は専門家でございませぬのでと軽く辞退されたが、主は、いや別に鑑定を願うのでございませぬ、気楽にみて欲しいと再三進められ、K先生も、それではお言葉に甘えて拝見させて戴くだけと、

断り、姿勢を正しくされ、一刀づゝ丁寧に拝見されていた。主は控え目ながらも、時々それは何々宮家からでたものだとか、これは大きな展示会で買求めた証明入りのものだとか些かご自慢らしい口振りであった。それに応えられるかの如くK先生は一層丁寧にご覧になるのであった。

やがて見終るとK先生は、更めて威儀を正され、深々と頭を垂れ、本日は鎧や兜と共に見事な刀剣まで拝見させて戴きまして、まことにありがとうございますと静かに挨拶された主は次に何か批評があるだろうと待つことしきりの様子であった。一方のK先生は、こんどは満面に笑みを湛えられ、またも丁寧にまことに立派なお品でございましたとお礼申上げるのであった。

帰りの電車の中で、K先生は先程の鎧と兜とのことについては細々と補足説明を加えながらお教え下さったが、こと刀剣の件にふれると、先生は固く沈黙され不気嫌のご様子であった。気になったが私もつい口をつぐむのであった。暫くすると、こんどはK先生の方から、口外してはならぬと釘をさされ、刀剣の話しをして下さった。K先生のご説明によると、あの見事なと思われた十二、三振の刀剣は殆んど駄物ばかりで、内一刀が辛うじて、まあまあという程度のものであったという。これには私も、すっかり驚いて二の句がつけなかった。驚いている私に向ってK先生は、静かに、さとするようにおっしゃった。

亀島君ね。世の中に本物なんぞ滅多にあるものではないよ。これは何れの道も同じです。例えば人間の社会を例にとっても同じ事さ。社会的地位の高きにある人、世の中の評判のよい人、人気のある人でも、それにふさわしい真価となると、本物は10人に1人もいるかどうか。悪いけど後は大抵、偽物と見ていいと云いたい位だ。世の中は、そんなものよ。君はまだ若いから信じないかも知れないが、この俺の言うことを覚えて置いて欲しい。きっと思い浮べることがあるよ。保証してもいい。しかし君に忠告するが、それだからと言って世の中をなめてはいけないことだ。君はこれからの人生の円熟期に入る年頃だ。ますます自ら修練し、またよく勉強に励むことが大切だ。そうすれば君がどんな地位の人に会っても、若しその人が自分より少しでも勝れているなと直感したら、その方はもう相当な人物だよ、そのときは、そう思って

心から尊敬することだね。それができれば自らの値打が上がる筈だと、聞いていた私は次第に頭がたれてきて、何かお礼の言葉を申し上げようと心で思いながらも、どうしても口が利けなかった。

15年の歳月が過ぎた。慈受のこもった暖かい言葉を残

して下さったK先生は既に亡き人の数に入られた。残された私はまだ、あの時の先生のお年までに達していないが、不肖の私故、あのときの先生の言葉が、やっと少し分りかけてきたように思う。

昭和63年 6月25日記

支部事務局から

お 知 ら せ。

。テレホンカードを増刷いたしました

仲々の好評です。1枚1,000円でおわけしております。クラス会などにどうぞ御利用下さい。
事務局へ御連絡下さい。

。会費納入のお願い

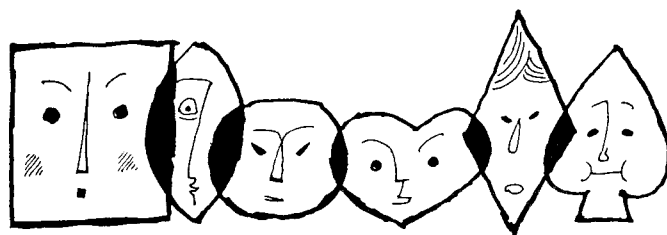
63年度分会費をまだ振込んでいない方は至急お願いいたします。会報次号に納入者氏名を発表の予定です。（納入確認のため）

。寄稿のお願い

会報はみんなが力を合せて作るものです是非、皆さんの原稿をお寄せ下さい。
又、会報等への希望、感想等もお願いします。
（400字詰原稿用紙を御使用下さい）

△秘蔵写真のお願い

大切に持っておられる珍しい写真をお貸し下さい。



昭和63年11月 第5号

発行人：新潟県立村松高等学校同窓会東京支部
佐伯 益一

事務局 〒108 東京都港区高輪2-1-24 (榊) 寿内
TEL 03-445-6501

郵便振替 東京 2-136445